



羽ノ浦の 過去・現在・未来

思い起こせば30数年前、羽ノ浦駅に降り立った私は、まだかわいいう学生であった。当時、羽ノ浦駅は急行も停車する立派な駅だった。構内には売店、駅前にはタクシー



羽ノ浦町
武市 智子さん

店先は、「山車」と呼ばれた豪華な出し物で飾りつけられていた。あふれる提灯に照らし出され、見物客でいっぱいだった。用水の通りには露店が所狭しとひしめきあい、目を奪うほどだ。ひと通り見物の人の流れに添って歩きつかれた頃、火花が始まるのである。圧倒される音量で夜空に浮かび上がる火花の見事な心揺さぶる情景が今でも目に浮かぶ。

話は現在に戻すが、阿南市に合併以降、羽ノ浦は閑静な住宅街になりつつある。しかしここに

と、私にとって絵に描いたような理想的な町並みだった。記憶の中、鮮明に残っているのは、毎年7月31日に「教会所」「黒住さん」と呼ばれる夏まつりが開催されていたことだ。夕方になると子どもたちがみこしを担いで町内を練り歩き、しつとりとした三味線の音で祭りが始まる。まるで京の下町のような通りの

次は、長生町の和田紀子さんをお願いします。

市民文芸

短歌

阿南市文化祭短歌大会選

入選

家族らは峽の瘦せ田を守りこし墓を洗へば生きの名浮かぶ

入選

骨折で動かせぬ手の片方で私の頬を包む叔母の手

入選

いつしかに居眠りをする耳底に笑う声する消し忘れテレビ

入選

吹く風は猛る暑さを揺らしつつ黄金色せる稲の穂を揉む

入選

栗の実をぼろり弾ける散歩みち秋風そつと土産をくれた

栗の実は産直市に並びをり秋のはじまりここに見つくる

暑かりし日の夕靄に赤き月お伽の国のやうに現る

俳句

阿南市俳句連合会選

笹の葉に足とられつつ山始

鶴羽 竹子

年玉をもらいたる子に貰いけり
関山 和女
仰ぎ見る日向の梅の二、三輪
数藤 君子
白欄に行事書き込む初暦
安部 和子
落慶の近き本堂小春かな
阿部てるみ
初暦病院通いの予定表
藤本 絹代
残されし盆梅香る一周忌
田中ゆり子
近づいて見れば冬芽の小庭かな
榎原さつき
前向きに生きる策練る去年今年
吉田 當代
峰宮の神鈴澄みて初日影
五光 春海

川柳

阿南川柳会 高木旬笑選

建前と本音がせめぐ闇がある
野村 敏子
再会が十九にさせる良き昭和
持木 寿栄
割り勘と言った手前か酔えませぬ
橋本 征介
古希迎えあちこちパーツ痛み出す
岡本 福笑
惚け防止孫が宿題持って来る
西田 修身